


 コラム
Column

江戸の農林団地・染井～滝野川

立川 雅司

現在の農林水産政策研究所の本部がある西ヶ原は、墨引（町奉行の管轄域）の内側とはいえ、江戸時代においては江戸市中ではなく、明治の東京市成立の折には、西ヶ原村、その後東京市が拡大し、35区制時には滝野川区に編入されている（その後、王子区と合併して北区に）。この辺りは、中山道から分岐した岩槻街道に面しており、一面の畑であった。明治になって、官立の蚕糸学校や農事試験場が設立される背景には、江戸以来の園芸地帯としての性格も縁なしとしない。以下では、西ヶ原も含めた周辺の江戸以来の園芸の伝統やその他関連する歴史について触れてみたい（事実誤認があればご叱正賜りたい）。

染井（現在の駒込駅～巣鴨駅にいたる辺り）は、ご存じ染井吉野桜を生んだ植木屋が数軒を連ねる地域であった。現在の東京スイミング・センターの北東側にこれらの植木屋は軒を並べていたことが江戸時代の地図から窺える。この東京スイミングから六義園まで到る広大な敷地には、かつて藤堂藩（伊勢）の下屋敷があり、この藤堂藩に植木職人は頻繁に出入りしていたという。藤堂家は、屋敷地として家康から与えられた上野の山（現在のの上野公園）に東照宮を造営したり、茶亭を設ける（動物園内に現存）など、上野の山を舞台とした造園にも様々な形で関わっており、植木職人への用向きが多かったのかも知れない。なお、現在の東京上野の地名は、藤堂藩領の伊賀上野とその地形条件が似通っていたために名付けられた名称とされている。このように藤堂藩は江戸園芸の間接的なパトロンともなっていたように思われるが、その領国に現在の三重県安濃町も含まれ、野菜茶業研究所が立地していることは興味深い。

滝野川は、現在は町名や出張所名として残されているが、かつては滝野川村、滝野川区として独自のまとまりを有する地域であった。そしてその名前を江戸市中や全国に知らしめたのは、タネ、いまでいえば種苗産業であった。日本橋を出て中山道をたどると最初

の宿場町が板橋である。鬼平などでは、犯罪をおかした下手人が博打に興じながら隠れていたりと、やや場末の混沌を漂わせた場所として描かれているが、その板橋に到る手前に滝野川は位置している。現在でいえば、「おばあさんの原宿」と呼ばれる巣鴨の地蔵通り商店街を少しすぎた辺りに、タネ屋が何軒か存在し、中山道を往来する諸国の人々が、これらの種子を買い求めた。特に、滝野川牛蒡や滝野川人参などが地名のついた蔬菜として江戸期以来著名であったし、練馬大根の種子も滝野川周辺で採種されていたようである。花木や野菜の種子の生産・販売は、一般に都市近郊で主要街道沿いに発達してきたといえるが、この中山道の滝野川はその典型であろう。中山道以外にも日本橋を起点とする主要街道（東海道、奥州街道など）のそれぞれに、縁の深い野菜が存在しているのも園芸の発達プロセスを示しているようで興味深い。たとえば、千住ねぎ、千住なす、品川かぶなどがそうである。

滝野川村にあった種屋は、いまでも数社が種苗企業として引き継がれている。この滝野川村の村社である八幡神社では、定期的に種屋が集まり、種子価格を決めたり、農家との取引を行ったりしていたことが伝えられている（戦前までその習慣は一部残っていた）。この八幡神社が江戸の種子マーケットのいわば中核的存在だったのである。

最後に、研究所の場所を江戸地図の中で確認しておこう。最近個人的に購入した『江戸東京重ね地図（CD-ROM）』（丸善）は、江戸の地図を現代の地図とオーバーレイさせながら見ることができる優れたもので、上記の植木屋の場所や各藩の藩邸の場所なども確認できる。それによれば、西ヶ原の農林水産政策研究所の辺りは、御用林となっており、通称「御殿山」という地名であったようだ。これは將軍家の茶亭があったための呼称だが、江戸以前は豊島氏の居城があり、すぐ近くの赤羽には太田道灌の稲付城もあった。確かに上野から続く河岸段丘の一角に位置する御殿山一帯は、戦略的にも重要な拠点だったのかも知れない。なお、教科書などに写真が出てくる道灌の座像は、赤羽の静勝寺（稲付城址）に保存されている。西ヶ原は、道灌が千代田に城を築いた時代から、その前哨基地の一角としてネットワークに組み込まれていたのである。

歴史は繰り返し、人知を越える縁で土地は結ばれているように思えてならない。